

シベリア自然探訪紀行

第1部：森と水が生きる大地へ



▲マヤ川左岸の森林……大きな三日月湖も見える



筆者
井上 信夫

昭和24年山形県飯豊町に生まれる。
新潟大学理学部卒業、県内の教壇に立つが、
かたわら魚類調査や子供たちの野外体験の指
導にあたる。二年前に転職して、これらを本
業とする。昨年から世界少年冒険村のスタッ
フに加わる。
〈連絡先〉環境科学事務所 ネイチャーワーク
新潟県中魚沼郡津南町芦ヶ崎甲1372-1
TEL (0257) 65-3622

私たちを乗せた小型機は、快晴
の空を一路シベリアに向けて、ア
ムール川に沿って北上していた。
高度二千七百mから見下ろす地上
は、一面の緑の森林と広大な湿原
の連続だ。水の営みを妨げるもの
はどこにもない。川は伸び伸びと
蛇行し、三日月湖や大小の池が散
在する。まさに森も水も生きてい
た。眼下に次々と展開する大自然
・・・その驚異的な規模と美しさ
に、私たちは声もなく圧倒される
だけだった。

昨日午後三時半過ぎに新潟空港
を離陸、わずか一時間半ほどでハ
バロフスクに着陸である。今まで
遠いと思われたロシアが、狭い日
本海を挟んだすぐお隣の国である
事が実感された。インツリースト
ホテルに一泊した私たちは、翌日
さらに飛行機を乗り継ぎながら、
目的地のシベリアに向けて千五百
kmの空の旅を続けたのだった。

大河レナ川水系へ

私たちの目的地は、シベリアか
ら北極海に流れ込むレナ川の一支
流のマヤ川である。付近の町ネル
カンは新潟から二千km北方に位置
している。過去の記録では、最低
マイナス六二度、最高三八度と、
百度もの温度差があるという。



▲ニコライスカヤに向う機内から
……低い山塊と草原が広がる

レナ川は流程距離四千二七〇km、流域
面積は二三八万三千七百平方kmで、その
スケールの大きさは、我が国最長の信濃
川（流程三六七km）とは比較にならない。
日本から離れるにつれて、乗り継ぐ飛
行機は、しだいに小さくなった。シベリ
アの未舗装の狭い飛行場には小型機しか
離着陸できないからである。アムール川
河口に近いニコライスカヤ飛行場で、小
型複葉機に乗り換えることになった。プ
ロペラが一つ機首についた零戦を思わせ
る見るからに旧式のもので、顔を見合わ
せる一同の間に一瞬不安がよぎった。
飛行場の送迎バスには、さらに度胆を
抜かれ、一層不安がかきたてられた。交
通博物館入りするようなボンネットバス
で、一度止まるとなかなかエンジンがか



一行が命を託した複葉機と
年代もののボンネットバス



からない。バッテリーがあがるのではという私たちの不安をよそに、運転手のおじさんは手慣れた様子でセルを回し続ける。黒煙を吐きながらやつとエンジンがかかると、私たちの歓声と拍手に、おじさんは得意げに手を振ってくれた。荷物を積み換え、いよいよ複葉機に乗り込む。「アエロフロートの操縦士の腕は世界最高だ」と自らに言い聞かせてはいたが、あのボンネットバスの事は脳裏を離れなかった。だが、短い滑走の後、軽々と離陸すると、私たちの不安は一気に吹っ飛んでしまった。眼下に広がる雄大なアムールの流れと、延々と広がる大森林に目を奪われたからである。快晴の空を複葉機は順調に飛び続ける。山脈を越える時には少々グラつくが、操縦桿を操作する世界一のパイロットの力強い腕の動きが見える。それにしても何という広さだろう。二時間飛び続けても人跡は全く確認できない。眼下にあるのは

ただただ広大な針葉樹の森林と谷間を蛇行しながら流れ下る川、そして湖と湿原・草原だけだ。森林限界から上の山頂近くは白っぽい岩山だが、比較的ならかな老年期の山々だ。同行のドクター・マキシモフの話では、一億八千万年前の大地だという。

我々の真下には、確かにヒグマやヘラジカ・ユキヒツジなどの大型哺乳動物がいるはずだ。しかし、双眼鏡を使って目を凝らしても、千五百mの高度からは視認する事はできなかった。

渺茫たる緑の大地・ 絶えない山火事

ふと見ると、快晴の空の前方に薄い灰色の雲がかかっている。わずかに鼻をつく臭いと大地から立ち上る煙・山火事だ。一面の煙が高度千五百mに層状になびいている。

この後、私たちは何度か山火事を目撃することになる。注意して見ると緑の樹海の中に赤く焼けた山火事後、新たな緑が復活した若齢林に気づく。後で実際に林内を歩いてみて、いたる所で山火事の痕跡に出会った。同行のマキシモフに聞くと、消火活動は全く行われていないとの事。雨が少なく乾燥しきったシベリアでは、落雷で発生した山火事は、降雪まで燃え続ける事が少なくない。時には沢沿いの雪の下で、厳冬期にもくすぶっているという。

「シベリアのマンモス」を著したフィツェンマイヤーは、一九〇一年に永久凍土に埋まったマンモスを発掘に旅行した際、各地で山火事を目撃して、「ロシアの財産



◀ネルカンに着いた一行



▲ヘリから見下ろすタイガと三日月湖



▲マヤ川の流れ—右岸には奇岩がそびえ立つ

である膨大な木材が、消火もされないまま無駄に燃え続けている」と嘆いている。百年近くたった今も状況は変わっていないかった。

しかし、広大なシベリアの大地では、山火事で失われる森林の割合は微々たるものだろう。その後には、新しい木々が芽吹いて森林は若返る。それが大自然の摂理なのだ。

二時間半ほどの飛行の後、給油のために降り立ったチュミカンは、オホーツク海に面した小さな町だ。滑走路のわきには、赤や黄色の草花が咲き乱れ、そのまま針葉樹の林や湿原へと続く。日差しは肌を射るような強さであるが、湿度は低く極めてさわやかである。乾パンとソーセイジ・キュウリとリンゴジュースの簡単な昼食をとり、再びネルカンへ向けて飛び立った。

シベリア行きのきっかけ

実は私はこれまで海外旅行経験は一度もなかった。飛行機が大の苦手、おまけに仕事に振り回され、ゆとりも持てなかったからだ。今回のシベリア探訪の旅は、友人の渡辺さんの誘いによって実現したものだ。釣り好きな彼はこれ

まで中国黒竜江（アムール川）上流部を毎年訪れていたが、今年はシベリアにいつてみようという。話聞く大自然にあこがれて同行する事にし、さらに私の息子と知人が加わった五人のシベリア探訪隊が編成されたのである。

ここで、四人の同行メンバーを簡単に紹介しておきたい。

- 渡辺 俊英・高校の数学教師、温厚ながら極めて強い意志の持ち主で、暑さや寒さ、暗闇やクマなど全く平気で、時折単独で山に分け入る。
- 内山りゆう・淡水魚写真家
若手ながら実力派の動物カメラマン。カメラとポンペを担いで世界中を飛び回り、魚やカエル・ヘビを追い回す。
- 河口洋一・新大農学部マスター
専攻は森林を扱う林学科。河畔林とそこに棲む昆虫類、魚類との関係をダイナミックに捉えることをテーマにしている。
- 井上 暁・高校一年生
私の息子。私が迷っている間に渡辺さんの誘いに一番先に飛び乗った。

それに今回の企画を渡辺さんに



▲トロマイト（苦灰岩）の奇岩が規則的に並ぶ

働きかけたN E Pのカルヤギン氏とハバロフスク博物館のマキシモフ氏（地学博士）が同行した。カルヤギンは、英語と日本語もかなり話すことができる。マキシモフは、地質調査でロシア、シベリア各地を踏査しているが、その合間に1m数十cmの巨大なタイムメンを何度となく上げてはいる。

清き流れ……………マヤ川

チュミカンから二時間弱、私たちを乗せた小型複葉機は分水嶺のジユグジュル山脈を越えてレナ川水系に入り、ついにネルカンに到着した。ここで、現地受け入れスタッフを紹介される。私たちは、ここから直線さらに一一〇km北方のピーター・ステイバーニチのキャンプまでヘリで下り、そこに滞在しながら釣りや自然探訪をするのである。

ヘリは私たち一行と、地元スタッフなど十人ほどを乗せて離陸した。内部はかなり広く、この二倍以上は優に乗れる。ネルカンの上空を旋回すると間もなく、

近くの中州に着陸した。

数人の男たちが降りてヘリの後部扉からピーターのボートを積み込む。四・五mほどの小型ボートだが、さすがに場所を取る。それを荷物や人間などおかまいなしに力まかせに押し込む。ロシア野郎は、驚くほどがさつで、パワフルだ。いらぬ気配りを重視する日本人とはどうも人種が違う。むしろ、政治体制は違ったとはいえ、アメリカ野郎と共通するものがありそう

だ。
ヘリの円窓から間近かに見るシベリアの大自然は、圧倒的な迫力である。マヤ川の蛇行部をショートカットして、タイガの上空を低空で飛ぶ。二十mほどのダウリアカラマツやトウヒ属の針葉樹が一面に生えているが、日本の山林と違って下ばえは少なく、地面まで見通せる。

やがてマヤ川上空を飛ぶ。規模は信濃川本流クラス、白波の立つ早瀬は見えないが想像以上に澄んでいる。流れは美しく蛇行して時に分流し、そこかしこに三日月湖が散在する。右岸には、高さ三十

ヘリから見たピーターのキャンプ
▼三日月湖の奥にあった



〜四十mの様々な形の奇岩がそそり立ち、遠景では白亜のヒルのようだ。目をこらすと水中に魚影が見えるが、上空からは大きさは判断しにくい。川岸にはヒグマやムース（ヘラジカ）の足跡が見える。マヤとは、エヴェンキ語で「美しい川・見事な川」を意味する言葉だという。まさに眼下を流れるマヤの流れは、その名に恥じないものだ。日頃見慣れてきた日本の河川とは本質的に違う。人工物は何も見えない。ダムもなければ護岸もない。流れは自ら命をもち、自然の摂理に従って侵食・運搬・堆積を繰り返しながら、多くの命を育み、人々が出した汚れを苦もなく浄化している。かつて我が国



▲キャンプの光景
渡辺氏と現地スタッフ

の河川もかくあっただろう。これが川の原点なのだ。

シベリアの大地で

ピーターのキャンプは、三日月湖のわきに作られた四棟ほどの丸太小屋と、馬の囲い棚、ジャガイモ畑などからできていた。

一行を真っ先に出迎えたのは、五頭のハスキー犬である。ムースやクロテン猟に活躍する猟犬で、毛色も大きさも様々だ。私たちは、後に彼らの実力を目の当たりにすることになる。

夕食を済ませた私たちは、ボートに分乗してさっそく釣りに出かけた。午後九時半（日本時間では七時半）、北緯五八度のこの地では陽はまだ高い。